

## 渡辺久子先生のインタビューから

## — もう一つの大切な話・遊び —

ダーリンプル親子

「元氣」という題で始めた前回(春)号のインタビュー。元氣はもとより、本当に多角的な視点・話題が、糸に手繰り寄せられるように出てきました。そのお話の中で、皆の中でもみくちゃんにされながら遊びに夢中だった幼年時代の渡辺先生、手芸が好きだった渡辺先生等、すてきなご本人の子ども時代に触れながら、専門家としてだけでなく、そのような子ども時代を過ごしたからこそいえる遊び論だったり、その遊びを守る保育者論や社会論にも触れることができました。前回のインタビューには載せ切れなかった、そんな大切な話を紹介します。

## 子どもが遊ぶということ

子どもの「元氣」を語る時、いろんな方面に話が向いていっても必ず戻ってくる場所がありました。それは遊び。私たちは、遊びが大切だとわかっていても、遊びそのものについて考えていくことは、忙しさを理由についつい延ばし延ばしにしていたりします。しかし渡辺先生は、「本来の子どもの体験を見据えた遊びの見直しをしていく必要がある」と提案しています。なぜなら子どもの遊びは人格の土台づくりであり、人類の未来にもかかってくるほどのものであるからです。渡辺先生がここでいう遊びとは、

身体ごと本当に遊び切ったという体験ができるもので、私たち大人は子どもたちにそのように遊べる機会を与えなければいけない。子どもに、大人よりももっと大きい世界、例えば大自然を見せて、その空の下で気持ちが悪くなった時に、自分たちでスケールの大きいワイルドな展開をしていける。そして、一人ひとりが心と身体にいい遊びの体験を染み込ませていく、そんな遊びが絶対必要だということです。

## 遊びが危ない？

遊びの大切さの話につながっていったのは、実は日本の子どもの発達が危ないのではないかということからでした。渡辺先生の恩師で成育医療センターの初代総長だった松尾宣武氏やカンボジアの地雷撤去に行っている石井麻木氏はそろって、アジアの子どもたちの目は生きていと言われる。その子どもたちのしなやかさ、目の動き方、手の動かし方等は明らかに私たちが都会で見ている子どもたちよりも発達している。決して経済的には豊かな国ではない

けれど、一歩、ミルクがあつて、ちゃんと子どもがかわいがられて、たくさん子どもがいる所に行けば、本来の子どもの姿があるというわけです。子どもが自分の中からきらきら輝いていくための体験。それを日本の子どもたちにも取り戻してあげる必要があるわけで、渡辺先生はそのこと自体は難しくないけれど、本気でつくらないといけないと断言します。ではどうすればよいのでしょうか。

## 社会全体で子どもの遊びを保証する

### ——フランスの場合

昨今の社会が子育てをどのように考えているかを見てみると、都会化社会の中でいかに効率よく子どもを育てるかに走っている傾向があります。そんな中、一九八九年にパリのフランスの議会（渡辺先生はその時アジアから唯一参加メンバーとして呼ばれました）で、三日間熱心に議論されたことがあります。つまり、フランスではこれから女性は皆働くから、

その時にフランスの保育園をどうするかということでした。一つの主張は、パリの駐車場並みに子ども遊び場を増やせということ。つまり、よく知っていて、自分の陣地がつくれて、やっていいこといけないことという子どもなりのルールがある、完全な子どもの空間をつくる必要があると言ったのです。そして、今のフランスはそれを実現しているようだと渡辺先生は感心します。パリの都会化されて大人中心の世界がこの二十年間で変わりました。それはすごいことで、例えば、子どもの場所がいっぱいあるし、育児が大変になった時に、携帯電話の連絡一つで税金で雇われた人が応援に来るといなのです。

### 社会全体で子どもの遊びを保証する

#### ——日本の動き

日本でも、子どもの活動が保証されていた時期はありました。それは一昔前の日本での、原っぱとか広場とか山とかという所。渡辺先生は、おそらくそこにお年寄りたちが子どもの安全を守るために目を

光らせていて、子どもたちはかなり温かく守られていたんじゃないかと言います。

では、現代はどうでしょうか。日本の子どもたちが子どもらしく発達していくためには「本来の遊びが好きな子ども」にその遊びを与えれば大丈夫、と渡辺先生は、東日本大震災後、放射線による被害も受けている福島での「郡山市震災後こどもの心のケアプロジェクト」の例を出して話してくれました。このプロジェクトには先生もかかわっているのですが、プロジェクトの中の一つに、大型遊具で遊べる広場「PEP Kids Koriyama」があり、大型遊具（ポーンランド社からの提供）が子どもたちを夢中に遊ばせてくれるということです。それらの遊具は、昔だったら危なかったかもしれない、例えば高いがけから飛び降りるといような昔の子どもの遊びに近いものが、安全な形でできるようになったものであり、シャワーのような汗をかきながら全身で遊び込めるものというわけです。屋外で遊べない福島の子どもたちや子育て中の家族にとって、そしてもしかした

ら、実は日本中で必要としている遊びがここにはあるのかもしれない。

もう一つの例は、天野秀昭氏（大正大学特命教授、NPO法人「日本冒険遊び場づくり協会」副代表）らの、基地遊びができるような子どもの空間（プレイパーク）を取り戻そうという活動です。子ども同士で安全に冒険できる空間、子どもの領分で社会性が築かれていく空間を保証することが大事だというわけです。そしてその時、私たち大人はしっかりと子どもの特性をつかんでいくことが必要だと渡辺先生は天野氏に同感しています。それは、子どもはまず探索が大好き、つまり危ないことが大好き。それから汚いことや破壊することが大好きで、そこから新しく何かを作り出す。そして子どもたちはよく感動したりエキサイトしたりして腹の底から思わず声が出る、だからうるさい。この危ない・汚い・うるさいの頭文字A・K・Uを続けて読むとAKU、つまり「悪」だ。これが子どもの特性。だから、悪に対する私たち大人の見直しが必要だということです。

## 最後に

兄弟体験がたくさんできた子ども時代を育ってきた大人が減っている今、私たちは意識して子どもたちにいい遊びの空間をつくってあげなくてはいいけません。それも、渡辺先生のいう「子どもの発達に必要な立体的な一つの空間」がいる。そのために私たち保育者は、先生のお子さんが通っていた「ぼーぼー子どもの家」がルソーのエミールを教科書としていたように、前述のAKUについて考えていくこともそうですが、子どもという人間の土台をつくるという深い保育意識、哲学をもって環境づくりを考えることが重要に思います。

そして、全身を使つての遊びはもちろん必要だけれど、その一方で、手芸が本当に好きだった渡辺先生は言います。

本当に好きなことが見つかるということは人生の一つの、そして大事な強みだ。

（中部学院大学短期大学部）